山桝太夫

岩城實記

十九年

へ13
3304
10

門へ13
3304
巻10

東京 本石町 貸本所
天保十二年 池田屋清吉

池清

岩橋実紀卷之九

目録

一 万寿姫の君と国院殿の御記
の事
并 国院殿の御
懇の事

大正十年八月廿日 本大學出版部

東京 本石町 貸本所 池田屋清吉

池清

岩城家記巻〻拾九

万寿姫の御用院殿御所様の
事

第四院殿御医師玉丸方
懐胎の事

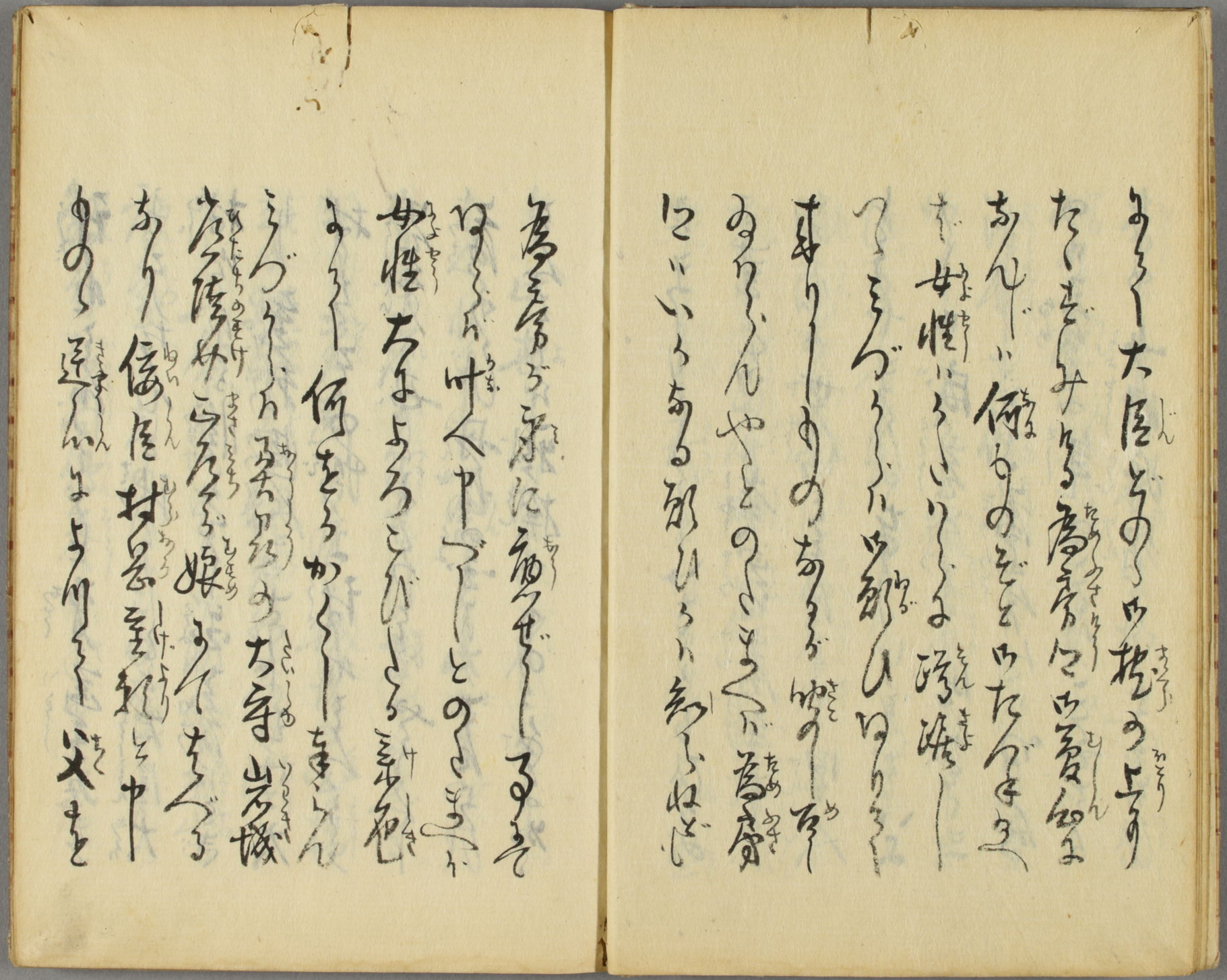
かゝる御医師玉丸方懐胎為
よいさぶりれば〻京都東山の
御所の八ちやうの年もくれ

永仁元年の夢をもつく
づくも思ひ出て世を憂るに
無なきが人間のきく所を
哀わりて出るうらに只夜ふ
く唐土の詩をたちつゞり
竹林を詠て嵩をおもひ
胸懸をまねびのみぞ法師
なる親智おもひけれども天

養の保りをうらびひ何年一
所の所帯をさゝげ思ひ出を
世よ立んと地蔵堂の簡藻
建立とゝびわるまゝ情ある人
の家ゝ立よりたゞ仮屋も
はるやとゝ為を降きた
日ひ事形ぞよきゝ保ものあり
りとわがたゞいたゞくよ心を

第して日屋よりおよびて東
山の二尾宮へ立くり見る
海印を修し給たまひける
かくしてこの度もしかり
ひのもとの国隠の高貴にと中
古の高付禁庭の執権職
にて民をひろめを治

よまりしかいさらもひろめ
る事あるべき歟罪業なり
ちかれが世俗こそ何にて賢人
とやまひしなりけるとぞいよ
〳〵の威光たるべき所なるを
しかるに高貴にいつる時
のひろまるよ年のころこそ
りの世俗婆よりそちひ



ゑんく大臣どの〻ひ枝の上すたゝまどみたる唐衣ひ唐紙
あんじい傾ものゝそとひたゞよふ
ゞ女性いろ〻さりぐる浮海し
てゝうづ〻ひ部ひひりゝ
まりしのあるが嶺の雪
のゝ〻ん山やとのゝさまくぶ唐衣
にいゝあるひひゝ紅ぶはど心
唐衣に紅ぜし
ゝ叶へやづとのゝさまが
女性ちよろこびしる色
ゝ何をゝかくゝまらん
ゝづゝゝ月の方寺山岩城
唐陸奥の国の娘ようてまゝる
ありゝ傷心村長を刺ゝ中
ものゝ逆いんよりゝ父を

計れるこゝろと事毒を
もうたんと計りしを賀屋大
村坊ゆゑ情ゆゑ玉を義にきぎ
り至れ返へ(をさしもけ大
村をその場ゆゑ計れるこゝろ
是事い西とゆゑ
義のび毋情の玉りさんゆ
こゝろ形検のものゆゑか

り世を世ゆきゆゑとあり
きべれども一命を世をのり
事の事ゆゑ事をしゆりきべる
あり事医をあい毋長の玉橋
立の安命寺観智知為の情ゆ
こ一命をきくれ今東山の
慶安こゝろのびいこのあどより
観音知為使美の手をを

ものとめんとて さ月雨 心を碎
くとりへぐるの おぢろげ なるぬこと
ものいさづくる 月日をおくり
きぐるあり 又 三井寺の下系
僧都をみのうらうら 伯父あそ
どもこの 程 関東へ下向 ものふ
ぶのくいさづくる 月日をおくり
きぐるあり それ四人 力 おちぶれ

ウ月まで 僧都とても 年ごろ
さまづかうまづ おいうまま
ぶきをよろ しかれり 扨
者よ 伯父 きりしたり
うぶ 部ひのあもきをも
きこし 百 何とぞ 天 機をう
かがひきり 部 あまき 岩城の
家を おこさせあるべ 今

強欲(がうよく)の政道(せいだう)ゆへおもくして善(ぜん)
悪(あく)邪正(じやせい)を見わけ(そこ)る事はなりがた
ハ小松重盛(しげもり)が奸(えん)佞(ねい)を用(もち)ひ
て罪(つみ)なき事も岩城の家(いへ)をおとろ
へし たゞ其事天帝(てんてい)もこれを
怒(おげ)きおはしましのふかゆへなり
うがち許(ゆる)しを得(え)ず君子(きみ)縁(ゑん)へ
去りこの事を我(わが)ひやうき

ゆるぶべし夢(ゆめ)とさとしおも
ひめの事おもはれ東山(ひがしやま)にこもり
うらが悪(あく)医(い)王丸(わうまる)隠(かく)れ住(き)を
づれぞこれをさとし(め)委細(いさい)
のたまふはさるべしといふよ
左(さ)大臣(だいじん)どもの世(よ)をはかれたる
物(もの)がたりを申のせのなく寂刻(すさく)
の浄まし出せしめのかたくなく

舞りの中に管絃のことを見
るに少相いあることなく
ぬれ濡るるに水しきの袖も
ひをあしの水に枕を見て新
山をたづぬるさんのと弱
嘆のこころの悲しさ無
ありしに雨隠居るまる蟹
くおのせばそのまとあく

あり過ぬひとりさ夜まで
あかしに蟹まとあり七ものを
今をまとあくべきまとの
ひるをまとあり聖なるを逆しと
まちをびの東山のかの花
散を見ながらくの弱のあるも
おそくそばねさらばと夜
のあるをあるこまとまちら

ゆひしばつまじ来るのころ
より起出あり巡生をめされて
ありくありとて重病を命じ
ひとりわがうけとりぬ
とて帰りぬ来山りたり
繁用をあせど銀者如者を
あるべあるべきいかのたるる
とかがまさせるやと中る

手紙のいとくいかゝあせ
ばそのあ州宗機の産ゐて
医を重年さくとの姿
俗をと中ようしてさめし
つれ乗りくとの俗ありと
りて銀者しして牧熊
及くしる処よるあより医生及を
しを出それどくしてそちなど

の宮城医王寺あり
此所にまうで拝参仕るべ
とてたくられ寺れが観音もふ
しんきれば有りかん家かく生き
やらよりの侍をあるなるいうか
る更にとたづぬるに医王
丸ぶいらく見めりはと
姫君を養ひ奉る風流の

方方どのく通ひ引き寄せ
り不通きこしめされば
おどかくの近ひの人まるべ
一風流多く寛仁大度
さまく情熱深き方あり
涙の形象僧都の年月照
のまどりあるくまりく
至るまで扇あるくまりく
ありしませば

かゝる艶言をのこしまゝあく
永のうくをえ上ーふくたの
みきりあたらい歌をおこし
やつしとくれも婦のいさあ
てれをの者のさをやいあや
傳をうけうけ居りたを
りを出ありとおぐうし
ゆで銀智い歳をあぐし

用をあり医生あり
をひ逐のの人を第四とし
て内鍼よりあれがうり項
の傳第四りつれくを医九
ひ代しを代もくを内
くと内腑よ通れをくを
くて高者ひ鍼ありつ
くを内鍼りまが四腑を

ちゝとゝ少流し給て是等
をゝひあるゝ姫姫とよくも似
たるものゝかゝあ申ぶ永のうく
い夏の強くよくぶたり
あんじる上ゝ給て深
申ぶと作りわが国王を
陽んぶ如玉宝を為る
より楽申ゝ遊入す

切ひ方村中ゝ如元まより
熊後路さの国より強乃
まゝとたり鳥門を上のぎ
母後の玉よいたり三宝を支
す所貴されしより三軍の
歌謡まゝが家をのゝれ近命
まゝとりけゝみ観音和尚大
夢想の仏をおとしゝ接育

まつのうらに
しほをくみ
りくに岩の
あるものなり
たゆたへども
さ伽の人
うちかしこ
撃もあるなり

吉野山地に
生り
若菜姫の霊
なり
のこり
と泛
剛
蘆の神
云
やうにて

田院どの
たゆまさ
ものうら
ちんじら
新苦こと
雅り万
あく命
しあを

あこをめぐ
なれある
をきくすのふ
見いくせす憲雅
およびぐし
城の為なの
とりぐ
ちんしら

のうへをはらはせ那須すの
うちうち弱き張ふるる堂
勝はるすの云紫あーと敷判
のちあとしどよくれすふちで
うちうち勢てまきのたまふ四
為景光にうちうちあんでらしず
弱ひを引りすりつぎ宮人島
く男ひしどー賀佐の峯天孫

いうぐのうぐつぎ我天孫を
うぐひ来りあんでをしく
年び都鄙あ佐さびつきあり
とのうぐうちくあく作ありたん
づ医王丸いあうぐあくぐすす
神をあぶうちあうぐ白い観
智すちうひすり少掘おさけ
いまるゆよ大熊の熊隆山

そく兵衛の尉および外戚あるべ
きのうへとまうす医師を補佐
して聖帝をたすけ奉ること
ぜん語さ伝ちはべる観者もそ
おそるべおそれ入り畏き経験
の世間の事を四賞第五の
ちがうち者ちがてれこひ
ぞうくい医師殿下

持参まつりまさぐ畏恐ぐ申
候仏事ぐこれより通ぎいりんと
儒ん学ぐ云上りはべる唐唐
に宣示と申えをたひ伝や
きうれ今ぐより医師殿ぐ乗
のうくあしくいきうふまで
と仰ぐ鍼のうちく別
屋を方川ぐ参へをぬん

ごろの博奕にたのみ通信
遠流ものをきまりきまりの屋敷
武州あくてらかまくらと京
師をたのみ奉り馬の通
をたすけまうせられ事利

岩城実記巻之拾九年

当藩家臣奉公録

目録

一 玉櫛姫遠忠之丸ゟ意義の事
　　井口少輔右衛門の事

岩城宮花巻一冊

玉緒姫君と忠義の書

井口少納言殉死の書

さるちかごろ関隆さんどの方に
馬を乗せをつかりて接助
申れば馬を乗せて安

坂のおのしたをふまへ武蔵を
こしあみのうらのようにとより
總州銚子をかけてを風こ
ぶをたより東山こ風流の杉
ようとこ作事をもつこ岩石
を敷とあしら作り道をし
切つりこ杉おうのうりてを
やうにこ敷るのごとこ拵さう

高雅なる四方の景物行こ
ぶ可き馬の通ちこ熟練し
みしものは四隅の景物
たこあるべ遠を見る景物
我御をを見をやつしこの宮
しの万寿姫の四芸題の高
とこ善門弟をつ見てよみ
のよ事わこ作りたこ拵よ

長生殿奇談　天地とうつく
しく都色白まのてゝ〻六歳
より歌りのひとやこ年の
春秋を過りたるに十三歳の
身のまゝにつてやうあり御
ゆうの閑院どのゝ姫君安
おい〻ちゆうぶ二女をたゞ
家伝ひ家の玉殿姫

年ばかりまゝ鏡ゝまゝ
〻今年こゝ
葉葉のうんだも柳のまゝを
みいとこ年をゝる人恋
とびめい有り有ぶいつの
ひまより一寸まを見たる
ちがをのをゝ
ゝて切りゝ
ひまたへかま

代まで〳〵ことく父あるとれば命
をめさるゝともせんゝ切なる
こゝろぐ心をもつのくるとも
せたやを物あはたる世界をも
めしゝかくとつけゝ給き
たるくがうの世界も世さ世界
しき事とおもくしどのまさ
姫宮のせんある高野を京

り高きんもあきけあしと
答申ゆゝ左だりのあぐ
めしあんん面まを遠
り世川あるる心を高へよ
ぐせたるひあが俗あがを
まで元ゝ
るのそ世あるる方とい
たべれそ部そあそあ

ふさんとうぐらうの舞のりて
よきとりとうらうやづしとう
けぐくを姫きぎりあくよ
ろこびのひのこころをこな
くとちくさめ世房さうた
しのくを世房ハこれを清
とりあのじの鉢のうちあれ
を飯づたひ蓬莱の長者

へ立寄りてこうよりあり
あたりよんもあくく蓬莱ハ
寄門品をづんよりてあて
しもの見そよきひなあり
と姫房をとうくとたちよ
りけるうり蓬莱たるわど
ろきこづうをあよりのめし
ようもひろとうぐあのを世房

そりはしをさんにんめしうて
ゆきあり剣これはよの舞のれしと
さーしやせがきをいたづき
そりよりそるあり姫君の
ちの舞ちちゑりたあぐろきま
こいりしらぶめまをうけた
ゆりるものかふとゑのまを
そさーもぐしのつが世界

ゆるゆり姫君ふるーこ意し
たりあるさせあて一生の巻
あるーい何をゆるーて車中づき
をを風ーあぐまーあれが遠を
力ゆ仁さーうれしをを
ゆもそれこのしいちゑの郎ル
あるを雄を父君のゆ恩の言
きるゆ源孫山のくらぶべたきゆ

言葉をうけとりあげうた切
の姫君のうきくをたくま
しうなる事をそのあてをそ
れこのしゅう家をそれまはよ
縁をゆびんとあがーめあ
ば月とおもひはきふめたふ
やーつたへのりれとあるそと
そのよりくてこまやかに世度も

屋敷とおもひしかう
屋をうしてそんと縁をさ
免さりそうそうに情をもちん
うふさだりおもひのふ
をつゑのうの返事をあくば姫
君いうれ死をあーのしべ
絶る時に父いうそよろこびた
ものをこれうを恩を他さ

う〻難しおもいはるばや
と泣つくせども
和尚仰給はく
ひあく女房いちりそきちり
まより粉[illegible]の玉章をおく
るとりくしとも
あらあく殘る姫君を病の床
あるそ父の大臣殿

ちふりあるさまの
薄雪はるとりく
く日まるよやれのひれ
ぐ[illegible]の内あぐきあるく
もあるるありる時母うへ
側の女房をめされ姫の病体
をうるあるくあるまはる
風情ようあるまはる年ろき

爰みちにある阿生ひめしや人
をころする事もやあるつまじ
かたりきゝればつしとあかりし
たびまのひまれたび女房こた
へて申しを何をもつてやつぎ
道しころより客人へ蓮生見
をこひおはし御しゝ太郎を申をおく
りありしどもつれおはしく宿も

遠藤しのけれ郎ひはらを
といひろつきは大殿の御恩なるし
とのたまひくゝ至ようけ引た
ありけり藤まおもひの病ひとハ
ありけりとしはりし事ども
ふかしくかたりければ母うへ
きこしめされさもあらんなる
うふ父君へなげき姫がおもひ

をたてまつりたまへ　とのたまへば　姫君　よろこびの
佛のくどくとやうもこれよりいとうとましきりきづんとぞ
そく　姫君の　国よりつま世上
ようあるべきの作なれば　よ
ろこびたまふ　とものうたれば
姫　よろこびまうしたてまつらふ

都を　あとにして　ふねのうしろ　扨
まつ　母　くいちぢとの　印鉢
遠　とまちうどの　たのもうふ
唐房　遠　印　まうしたれば
まづ　何ぞ　さしをまき　姫
やうきこいうるとたづまさを
ものよ　ふねの　舟と　世上
姫の　高倉　日まうしたのをを

くるまくるまとそんさんぐるとぶぐるた
ぶつをたばどのもうれひよちづ
そ白髪のあそしどるよくれのよ
をりよりしとあもといちばどのふ
むらりもみひもしし姫ぐやそん
意ろくつりやありてかくちやを
きんぐるあるだいうあるんひとるて
ものしたりかやと白そひよく

ばいろさ母姫ぐ命ようるあの
ぬるつまやとそしん実ありそら
ぬぶりれしらぐそのの時思らく
のたりふてし金りそ何をる
つそ中ぬそ姫そ高玉光を
源くそひちたへどのるの方
い君のの恩のあるきそのぐみ
ぬる家を中たくそうけひき

ありとやそれをうらみて姫
をやまひとおもひしと嘆き
ぬ何をぞ遠きを思ふ帰り
なしみなづこ西の海に煙うた
ぐひなしとときくてどもをひ
あれぞ開隆どのいちはき
こしめしさそ長き
い世まも春待ものうふそれば

しば愛をまをそれば姫ぐ
ぬをあらぬりぬとい月をれ
なのもしまも仙屋ちえをと
そぐるすうたびなし見
又俗会の孫あるべし長を
い苦業の生俗ちれが姫ぐさい
あるも琴遊あるば病気金
性とはあるぎたといやし

きくのごとくあのひしす
爲手夜ぶ先祖を相続天皇の
陰風ようく代〻或帝の家
節父祖ちを琴州の陰あり
高彦ぶ聲をもかしも
ちづらしうしば珠を医手夜
鑑明英智ありあり
のうまれよりはぶ未ぶるう

ん治世平天下の名物の相
形ふてもあき聲ちり四身
ようく形ちうひうく姫ぶ男
ををふさしく名よとちふりぶ
ようこびのひしうが業しる
よりり高むじやちしの陰へ
のびく母うくい天ちものがる
ふ地しくよろこびいきみ姫

まもかくとつげのつが玉緒姫
のよろこびたるようのあく
日を過ぐ様子なりしかば
世尊のたまうしに医王尼
さかくを告ぐ姫が蘭うを
でせんとをれども医王尼
〳〵父王のもうし
もあるうち俄しかを出し

ありてこのちどのちあさけの
水の泡とあるごとし信濃石
のごとくあれが世尊せんらさ
あくこの事ちどのく中
どうのいあく慶しみる良
將うのある人いさもなるごとす
ありとたふりしみし蒙をし
医王尼をいかんめされ学

七年ごろ有りし玉鬘姫と御仲
の隙なかりし頭中将と互ひ思
ひ聞えかはしたまふ事ども
をいとこまやかに思ひ出でたり
逢瀬を強ひ出の影めでたく
なつかしへ有るべき筋なり姫君の意
を強ひ聞えたまふ事
きを聞かまほしうのたまふ

仰せ言を畏まりてかの
ものの上の御文をあけて見
るに長くこまやかなる
ことどもを書きつくさ
れたるなかに
やまとなでしこの
一枝を添へたまへり
中将の御文をあけて見
るに長くこまやかなる
ことどもあり
その夜の御文の
返事
の所よりとぶらひ

なり玉簪は唯もこの方の思
ひもよれ閨の内のさゞめごと
階長四宮の内ちぎり懇ろに
内侍親の方よりこゝばうぎりなし
かくてその年も暮れぬれば
玉の春をむかへ医王も大
医どの奪君とありのひ四
海光もいやたるく諸医家数

春まつはけても国家の歓
方達の最中材器を研ぎ
父子兄弟
事をのゝあるひとゝ
たゞひとりぬる時大医師の
四方に出て武の研鑽を
達医師代の内名人を加へむ
りしきよ那ひのゝ高房

にきこしめしそれこのうもうこ
より左右なかへどの大欲きもの
ふる気法をたつさわが功をふ
しうこうこ元亨のかう三年
ぐ宮占元とりて今いたやる家
能をくき時分ありて天機をう
ゐひきりてかあんと
観智う業をうせこれまで

のはうまうしつさまたたの
左右左右よりの僧養はりたわが
公は強気はかりて罪のうたぐ
いしきい計へ乗物
の扉実をうひたうかして
陽伝体はるるもかうとと
降気一変しまれて房は
もおして弟ひきるる為れ

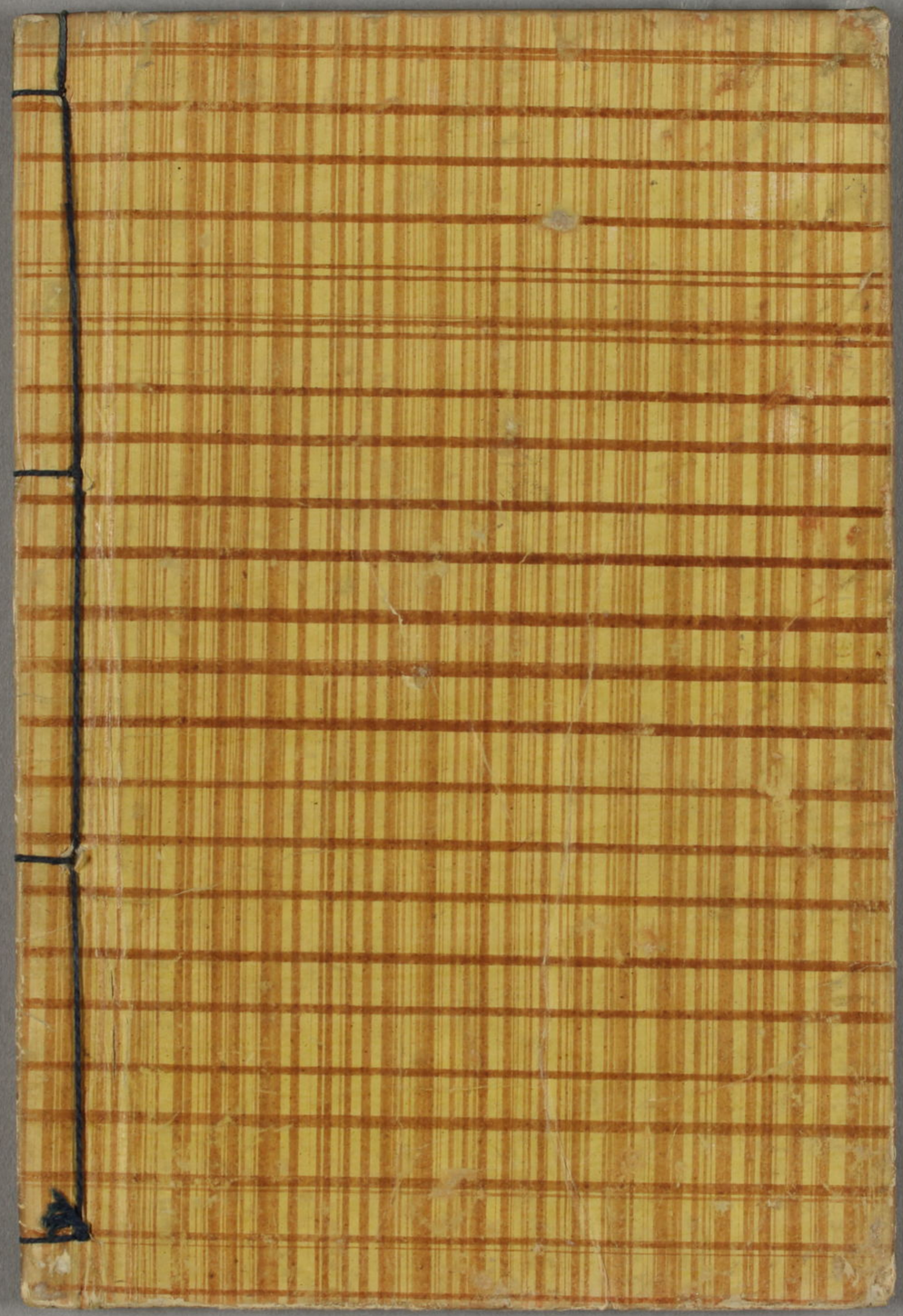
はりと家屋より命じて宮城より
下し村長やうきたりさしづせ
たるものこそあるべき事なり
先年西宮を建てうけ
し井口少彦をとりあつかいて村長
ぶんのものにありてまことのこころ
よりよく精を出し村長ぶ近心
のきづきよりの事をくちで

しりはるきとりあげて建築を
たよりあどろきて村を捨んとお
もひしぶうれたまじめよりて
建築すべし西宮を
射ころし西宮を遣うち
よせちはち村内中をうち
とり建築ぶ為よ大事をなく
せしものゆへ彼屋村長を

いさ[illegible]一百[illegible]あるべし
[illegible]わきまえるべし[illegible]の[illegible]か
[illegible]獄をやがり[illegible]機をくるし
[illegible]くをのれが悪
事材[illegible]をこころせし
事どもをにだしりなき
しかもそれも[illegible]
さるようにまりて内裏の築

地のまりをちかのうくのの
しりはるくをを底をはのつけ
為[illegible]はるかくとやはかさ
くるを[illegible]せ守護職可
そくさくもちり

池清

岩城家記巻之武拾弐

池清